公立大学法人札幌市立大学で理事長・学長を務める蓮見孝氏。医療とデザインという異分野の融合や、社会を拓くデザインのあり方など、新たなデザインの可能性を模索する蓮見氏を紹介する。

異分野の融合がもたらす新境地 デザインが運ぶ豊かな社会

大学卒業とともに、日産自動車のインハウスデザイナーとして20年間、エクステリアデザインに携わりました。そして1991年に筑波大学に専任講師として着任しました。

筑波大学では、茨城県や県内の市町村を中心に地域のデザインに関わってきました。日立地区の中小企業の自立を促す地域産学官共同研究事業、茨城県酒造組合の依頼による純県産酒のブランディング、廃業の危機に立つ酒造所の再生、消滅が危惧される石材業の活性化など、プロジェクトは多岐にわたります。

大学では、キャンパス内にある筑波大学附属病院（以下、附属病院）で、10年以上にわたりホスピタル・デザインに取り組みました。医療環境改善の推進は、デザインの社会的な役割への期待に応えるものと思っています。

そのきっかけは、附属病院に行った時に感じた殺風景で冷たい印象でした。大学には若い学生たちが大勢いて活気があるのですが、同じキャンパス内にある附属病院の雰囲気は、全く異なるものでした。そこで、ユニバーサルデザインを教えていたこともあり、課外活動として病院通いをするようになったのです。学生たちも、日常生活とかけ離れた病院の環境に違和感を覚えたようでした。

例えば、ホテルで「6人の相部屋です」と言われたら泊まる気にはならないでしょう。しかし、入院となれば、6人部屋に入れられて、自由もプライバシーもない生活を強いられます。患者さんにとっては、入院も生活のワンシーンであり、もし1年間入院したとすると、それは人生が80年だとすれば80分の1にあたるのです。そこで、療養環境の改善に真剣に取り組もうということになりました。

まずは看護部にお願いして、院内でアート活動を始めました。かわいらしい日めくりカレンダーをデザインし、無機質な空間だったトイレに置きました。いつも誰かがめくってくれていることを確認できました。冬になると入院患者さんとクリスマスリースづくりのワークショップも行いました。参加前と後では表情が激変し笑顔が見られることを観察することができました。

大学に隣接する筑波メディカルセンター病院では理事長先生の理解を得て、50mの長い廊下でアート展を開催し、それをきっかけとして、家族控え室のリフォームや食器プレートの改良、さらにガーデニングへと活動が広がりました。

今、アートとデザインは医療機関との連携を深めつつあります。アートミーツケア学会の活動など、様々な広がりが見られるのです。アートはこれまで日常生活とはかけ離れた孤高の存在でありがちでした。これからはダイレクトに社会に関わろうとする能動的アートのあり方も模索されていくことでしょう。そしてアートをよりよく社会につなげるしくみをデザインがつくり、アピールしていく。それが顕著に表れるのは医療の世界なのかもしれません。

医療関係者にも、積極的にアートを取り入れようという動きが見られます。終末期の患者さんはこれまで安静を保つことが常識でしたが、今は折り紙などの日常的表現行為を行いながら自然に最期を迎えるケースも見られます。人間らしく生き尽くすというような死生観を大切にするケアのあり方が求められています。そこにアートとデザインの新たな可能性が感じられるのです。

蓮見 孝
Takashi HASUMI

札幌市立大学
理事長・学長

www.scu.ac.jp

医療とデザインが融合する大学 デザインの新たな可能性

2012年4月から札幌市立大学の理事長・学長となり、大学のデザインを託されることになりました。大学は、デザイン学部と看護学部の2学部で構成されていますが、その両者は全くの異分野だと思われてきました。しかし連携を密にすることで、人の生涯をより充実したものにする活動が推進できるのではないか、と思っています。

大学における〈D×N〉、つまりデザインと看護の連携の地平を指し示すものとして「ウェルネス」というキーワードを掲げました。誰もがイキイキと暮らし続けられるしくみのデザインです。極端な例ですが、認知症のお年寄りがいて徘徊を始めると、それを制するのが今までの対応でした。それに対し、もっと楽しく徘徊することができれば、これまでにはない治療効果があるかもしれないということになり、制度論的な研究テーマが生まれます。

ユニークな着想をするデザインと、ケアを見据えた看護が連携することで、人間科学の裾野が広がる可能性がある筈です。例えば助産学の先生から、デザインの相談がありました。死産となった小さな胎児の棺は薬の空き箱などが利用され、その親にも心理的負担を与えていたようです。消費社会に長らく関わってきたデザイナーには、そういう現実はうかがい知れないものでした。さっそく胎児の棺をデザインし販売に至りました。「おかしいとは思っても、どこに相談すればいいか分からなかった」、という助産学の先生の言葉が、連携の大切さを物語っています。

学生が夢を語れる社会へ
新たな価値を生み出すクロスデザイナー

■はすみ たかし　プロフィール

札幌市立大学　理事長・学長

略歴

1971　東京教育大学教育学部芸術学科工芸工業デザイン専攻卒業
　　日産自動車株式会社造形部入社
1976　ROYAL COLLEGE OF ART校（英国）社命留学
1987　日産自動車株式会社デザインセンター第一モデル課長
1988　同エクステリアデザイン室代表主担
1991　筑波大学芸術学系専任講師
1993　同助教授
2000　同教授
2004〜　同大学院人間総合科学研究科教授
2002〜04
　　芸術専門学群 副学群長
2004〜08
　　筑波大学広報戦略室長
2008〜09
　　筑波大学学長補佐
2012〜　札幌市立大学　理事長・学長

著書

『マルゲリータ女王のピッツァ －かたちの発想論』（単著）（筑波出版会発行・丸善発売／1997.7／1,600円）
『ポスト「熱い社会」をめざすユニバーサルデザイン―モノ・コト・まちづくり』（工業調査会発行／2004.9／2,205円）
『地域再生プロデュース―参画型デザイニングの実践と効果』（文眞堂／2008.4／2,100円）　他

学会活動／外部活動等

日本デザイン学会理事・評議員（現）
グッドデザイン賞：グッドデザイン・フェロー（現）
東海旅客鉄道株式会社 デザイン委員会委員（現）
財団法人日本サイクリング協会評議員（現）
茨城県生涯学習審議会・社会教育委員 会長（現）
いばらきデザインセレクション審査委員長（現）
茨城県都市計画協会「まちづくりアドバイザー」（現）
茨城県中小企業テクノエクスパート（現）
国交省 観光まちづくり事業（常陸太田市）座長（2008〜2009.3）
茨城県総合計画審議会 副会長（2009.11〜2012.3）

異分野をブリッジング（架橋）するデザインは、D×Nに留まらず、さまざまな領域で推進されるべき社会的テーマになるでしょう。

その根拠の一つに、高度経済成長社会で顕在化してきた分業化と専門化があります。それは効率化や高度化に貢献した反面で、高度に総合化する社会的能力の衰退を招いたようにも思われます。教育もまた狭い領域に細分化され、全人教育というような概念は駆逐されてしまいました。社会においても一人暮らしの増加やコミュニティの衰退が進んでいます。総合的に現状をとらえ解決に導くしくみを再構築していく一歩として、異分野連携の実践はなくてはならないものであり、デザインが有するコーディネート機能はますます社会にとって重要なものとなるでしょう。

もう一つの根拠は少子・高齢・過疎化の進行です。北海道は九州２つ分の面積があり、５５０万人が住んでいますが、30年後には人口が１００万人も減少すると予測されています。札幌市の人口は１９３万人で、都市への一極集中が進んでいます。５ヶ月もの間、雪に閉ざされる北海道は、高齢者が孤立して住むには過酷過ぎる自然環境です。持続的に地域社会を維持していくためには、社会を構成する多世代・多セクターの人々が連携し、参画し合って社会のあるべき姿を模索していく必要があるでしょう。そのような地域のプラットフォームをどのようにデザインしていけばよいか、そして大学は何ができるのかを問われる時代になっています。

札幌市立大学は、本年、札幌市と共同で文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学ＣＯＣ事業）」に申請し、全国52提案大学の一つとして採択されました。大学の機能別分化という考え方に添い、５年間にわたる補助金を得て、地域の核となる大学をめざします。テーマは「ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」事業」。廃校になった小学校を再活用して学び舎というＣＯＣキャンパスを設置・運営していきます。

教育の改革として、これからの地域社会の担い手となる大学生、小中高校生、市民、行政、企業など、多世代・多セクターの学び合いの場を創成します。研究としてウェルネス・サイエンスを推進し、心身の健康、質の高いコミュニケーション、生涯にわたる生き甲斐づくりなどのテーマを深化させていきます。そして社会貢献として「住み続けたいまち」のあり方を多様な人々との協奏で描き出していきたいと思います。

学生が夢を語れる社会づくり
〝正解がない〟という価値観

次世代を担う若い学生たちが今、将来に向けての夢や職業に対するイメージを持てずに就活で漂流し、人生一度の青春期を無為に過ごすケースも少なからず観察できます。

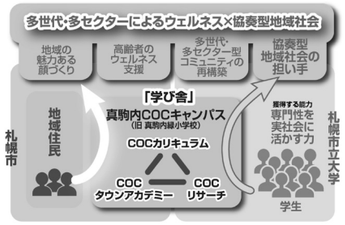
しかし、キャンパスに留まることなく社会に飛び出し、多様な人々と交流・協奏し、多少でも成果や社会的評価を得た時、学生の目は輝き始めます。それこそが主体的学びであり、自らの社会的使命感を発見するきっかけともなるのです。

経済産業の拡大成長に貢献してきた科学技術には、人々の生活の質を向上するという新たな役割が求められています。成長型社会から成熟型社会へ、そして縮小型社会へと向かいつつある今、これからの持続型社会を構築していくために文化的技術の開発が求められています。今までの社会には、正解と不正解がありました。そして「勝ち組と負け組」というような表現も生まれ、それが金太郎飴のような画一化を生み出してきました。持続型社会を支えるのは「多様性」であり、それを支えるデザインの力であると思っています。

❶筑波メディカルセンター病院の家族控え室リフォーム
Renovated waiting room at the Tsukuba Medical Center

❷筑波大学附属病院におけるワークショップ「こもれび」
"Komorebi" workshop at the University of Tsukuba Hospital

❸石匠の見世蔵
The "Ishiku no Misegura (Stonecutter's Storehouse)" spectacle



ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」概念図

Chairperson and President of Sapporo City University

Career Summary

1971 Graduated from Tokyo University of Education's School of Art & Design
Entered the Nissan Motor Co., Ltd. Shaping Department
1976 Studied overseas at the Royal College of Art (England) on company orders
1987 Manager of Design Center 1 Modeling Department at Nissan Motor Co., Ltd.
1988 Chief Representative for Exterior Design at Nissan Motor Co., Ltd.
1991 Full-time lecturer at the University of Tsukuba's Institute of Art and Design
1993 Assistant professor at the University of Tsukuba's Institute of Art and Design
2000 Professor at the University of Tsukuba's Institute of Art and Design
2004 - Professor at the Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba
2002 -04 Associate Provost of University of Tsukuba's School of Art and Design
2004 -08 Director of Office for Strategies of Public Relations at the University of Tsukuba
2008 -09 Advisor to the President at the University of Tsukuba
2012 - Chief Director and President of Sapporo City University

Writings

"Pizza for Queen Margherita di Savoia – Methodology of Styling Design" (sole author), (University of Tsukuba Press), (Distributed by Maruzen, July 1997, 1,600 yen)
"Universal Design toward the 'Post Hot Society' – Product planning, Renovation and Community development" (Kogyo Chosakai Publishing Co., Ltd., September 2004, 2,205 yen)
"Produce for Revitalization of Region – Trial and Evaluation of Collaboration for Social Designing"
(Bunshindo Publishing, April 2008, 2,100 yen) etc.

Social and External Activities

Director and Councilor in the Japanese Society for the Science of Design (current)
Good Design Award: Good Design Fellow (current)
Member of the Central Japan Railway Company's Design Committee (current)
Councilor for the Japan Cycling Association (current)
Chief Director of the Social Education Committee and Lifelong Learning Council of Ibaraki Prefecture (current)
Chairperson for Ibaraki Design Selection (current)
City Development Advisor for Ibaraki Prefecture's City Planning Association (current)
Technology Expert for the Small and Medium Businesses of Ibaraki Prefecture (current)
Chairperson for MLIT's Business for Tourism and City Development (Hitachiota City)
(2008 to March 2009)
Vice President of Ibaraki Prefecture's Council for Comprehensive Planning (November 2009 to March 2012)